

<前回>オリエンテーション**<授業の概要・目的>**

本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たなる展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2017年度後期は、「科学技術とキリスト教」系の諸動向を参照に現代の宗教哲学の課題を考える。

<成績評価>レポートによる。

<受講の注意事項>

・質問は、オフィスアワー（火3・木3）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

<配付プリント>

<http://tillich.web.fc2.com/sub5av.html> に掲載。

<導入>「宗教と科学」関係論」に向けて——科学、宗教、呪術

1. 科学と宗教、両者の関係は、単一か？

近代科学（ニュートン力学をモデルとして、18世紀に確立した、実証主義的近代科学）が唯一の科学概念とすれば、古代、中世に「科学」は存在しないことになる。あるいは、現代科学の中にも「科学」ではないものがあることになる。

2. 「科学」は古代科学や中世科学も科学であるとして捉えうるように、概念化する必要がある。同様のことは、「宗教」についても当てはまる。

3. 近代以前の伝統的社会における、科学、宗教を論じるためには、第三項としての「呪術」を視野に入れることは有益である。

また、科学と技術との関わりも、明らかにすることが必要。

4. 人間の共同的な営みとしての「科学」「技術」「宗教」。

↓

「意味」「意味行為」「意味世界」から「科学」「技術」「宗教」へ。

- ・意味世界とその根拠付けとしての宗教
- ・「人間は意味に固執する存在である」＋「人間は本質的に宗教的である」
- ・象徴を操る能力によって構築された世界（自らの存在意味が確認できる世界、自分らしさが確保できる世界）を「意味世界」と定義する。
- ・意味世界は相対的である、歴史的あるいは偶然的である→恣意性・無根拠さ
意味世界は意味世界内部では根拠付け得ない。
- ・意味に固執する動物としての人間。
無意味性の脅威 → 人間は意味世界を安定化させるものを求める
- ・無根拠な意味世界を安定化させる装置として社会的心理的に生み出されたのが、「意味世界の正当化としての宗教」（なぜに答える、生に意味を与える宗教の機能）である。
- ・ティリッヒの宗教論：広義の宗教概念(意味根拠としての宗教・意味世界の正当化としての宗教)と狭義の宗教概念(制度化された既成宗教・常識的な意味での宗教)との区別。
- ・ルター「大教理問答書」(『信条集 前篇』新教出版社、91頁)
マンモンという名の一つの神。

5. 科学と技術：意味世界の合理性（因果性・力）
- ・科学＝合理的知（世界と人間）、この合理性の具体的な理解が古代と現代では異なる。
 - ・技術＝合理性に基づく実践的活動（世界と人間の改造あるいは形成）
- 科学・技術：世界観に基づく営み
- 古代からの伝統的な世界観＝伝統的な意味世界
- 科学：占い 技術：呪い
6. 伝統的な「呪術」は、技術の母体である。
- 古代の呪術は最先端科学技術に相当する → 権力によって独占すべき事柄
- 違いは、合理性の内容にある。類似と接触。
8. 宗教：聖なるものの顕現とそれに対する人間の応答
- 意味世界の生成あるいは根拠付け、そのイメージ化→宗教文化（科学／呪術と並列）
- ヒエロファニー：世界軸、三層構造世界観あるいはコスモスの生成
10. 現代はどのようになっているか。
- 三層構造世界観の平面化
- あるいは近代的世界観とその内部での意味世界の二重化（公と私）
- 公の一元化と私のアトム化（細分化）
- 公が揺らぐとき、意味世界は一挙に不安定化する。

1. 「科学技術とキリスト教」系の動向を見る

1. 現代神学的前提：1920年代から1960年代へ。
- ・19世紀的状况へ批判的分離：自由主義神学＝近代的学としての神学
- 実存・生へ
- 自然神学批判
- ・19世紀からの継続：特にドイツ神学の場合。自然から精神・自由へ
- 空間に対する時間の優位
- 地理 歴史
- ↓
- カントもハイデッガーも
- ・現代神学における「自然」の忘却
- 自然あるいは自然科学を神学的に論じる基盤の喪失
2. 「科学技術の神学」系
- ・科学論の神学
 - ・「宗教と科学」関係論の基礎理論、プロセス哲学
 - ・「宗教と科学」関係史
 - ・現代科学がもたらした新しい問題状況
- 理論的と実践的あるいは倫理的
- 生命・環境・心・脳・原子力

(1) 科学技術の神学の衰退

3. 神学と科学との分離＝対立の原理的回避 → 無関係・無関心
- 進化論に象徴される近代科学との関係をめぐり、20世紀の神学の有力の流れは、科

学と宗教との分離・区別を選択することになった。不毛な対立を回避し、本来の専門領域に専念するという方向付けである。宗教の純化（心の救いの問題に集中する宗教）。

つまり、本来、宗教の役割は科学とは異なっており、それぞれが固有の役割に専念すれば、無用な対立は回避できるはず、宗教と科学との間には、関係も対立も存在しない、対立は、宗教が擬似科学となり、科学が擬似宗教となるところに生じる、という議論である。

近代の知的世界との差異化による固有領域の確保の試み（＝止めどなき後退戦）。

これと弁証法神学の構想（神学の本来性の回復）がリンクした。

4. そのために採られたのが、意味と事実との区別——宗教は人間の生きる意味・価値に関わり、科学は事実に関わる——、あるいは客観的真理と主体的真理（キルケゴール）の区別という論理である。たとえば、ブルトマンの聖書の非神話化（Entmythologisierung）あるいは実存論解釈はその典型である。

世界観と信仰との分離（聖書テキストの世界観の枠組みと信仰内容との分離）

聖書と科学の対立は、古代的世界観（黙示文学、グノーシス主義を含めた）と近代的世界観との対立に帰着できる。

こうして、宗教と科学の対立は原理的に解決を見たと言える。

5. 創造物語に表現されているのは、創造の善性と概念化された信仰内容であり、創造物語は、事実のレベルで、宇宙や人間の発生を論じているのではない。聖書は科学の教科書ではない。大切なのは、人間には神によって与えられたそれぞれ固有の存在意味、存在価値があるとの信仰、そして人間は他の存在者との関わりにおいて活かされて存在しているというメッセージである。
6. こうして、科学と神学との接点は希薄になる＝「科学技術の神学」の衰退

（2）ブルトマンの実存論的神学の場合

1. 聖書学者ブルトマン → バルトの弁証法神学への関与以降も、自由主義神学との関わりを保持。

↓

聖書学でないとなれば、信仰はどこで可能になるのか？

2. 近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立

近代人は聖書的な宗教を信じうるか？

→ 信仰の事柄（宣教、内容）と世界観（形式）との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。

3. 聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈
4. キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理
信仰と世界観との区別・分離 → 信仰の主体性の純化
これは個人的な事柄か。
5. 聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。
世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。
ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）
6. 説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）

→ ブルトマン学派における「言葉の出来事」

神の語りかけと決断

8. ブルトマン神学の骨格

- ①言葉の出来事性：語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断
- ②時間性—終末論的（そのつどの今）→決断・聴従
- ③理解：神理解—自己理解（神学—人間学）の循環
- ④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違
- ⑤客観性→主観性・主体性
→自由の処理できない・神の主権

（3）関連文献

A. Glauben und Verstehen 1（著作集 11）

0. 「自由主義神学と最近の神学運動」（1924）

1. 「神を語ることは何を意味するか」（1925）：③④⑤

「～に関して語ること」は、常に、語られるものの外にある立場を前提とする。

語り手の具体的・実存的状況とのかかわりなしに真であるような一般的命題・一般的真理として神を語ることはありえない。（34）

体験や内面生活は、われわれはそれを客体化するやいなや、実存的性格を失っています。

そうした関連が失われると、この命題は、神が人間と全く別なあるもの、形而上学的実体、霊界、……要するに非合理的なものであることを意味しうるにすぎない。（37-38）

この世界の統一的連関の中で理解しうるものを現実的と見なす。（39）

この世界像は、われわれ自身の実存から目をそらしたところで立案されている。そこでは、われわれ自身は、諸々の客体の中の一つの客体と見なされ、われわれの本来の実存への問いから目をそらして獲得されたこの世界像の連関の中へくみこまれる。人間を加えて完成させた世界像を人は通常、世界観（Weltanschauung）と呼ぶ。（39）

2. 新約聖書のキリスト論

パウロの研究が認識した神話論的表象は、それとどのように関係するのか。救いの生起とキリスト教実存の神学的説明はすべて、同時代の概念性の中でなし遂げられる。その説明は、常に人間とその世界について語ることでもあるから、伝統的な人間学的・宇宙論的概念の中を動く。そのような概念は時の流れに沿って変化するので、パウロも神学やキリスト論も、批判ぬきでは理解されない。（296）

3. 新約聖書における神の言葉の概念：①④

説教は聴くものの良心に向けられる。

人間についての理論的教えではなく、語りかけの生起が、実存的自己理解の状況を、実際にとらえるべき自己理解の可能性を人間に開くのである。語りかけは、あれこれを任意に選択させるのではなく、決断を迫る。（316）

説教は信仰を要求する。（317）

解釈は、有意義に遂行されるとすれば、当時の状況に応じてはめこまれていた神話論的概念性から実際に解き放たれ、それによって本体の意図が認められるようにならなければならない。

形而上学的意味での神子性、処女降誕、先在、最後のらっぱの響きと共に雲に乗ってくる再臨などの諸表象は、確かに神話論である。しかし、神がキリストの十字架を通してこの世にゆるしを与えたという思想も、神話論として除去されて良いのであろうか。……除去されるべき神話論はどこまであろうか。それはキリスト教信仰にとってどこまで本質的なのであろうか。

神話論を除去するための批判的基準が与えられないだろうか。(357-358)

B. Glauben und Verstehen 2 (著作集 12)

4. 「新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解」(1940) : ②④

信仰は世界観ではないということである。というのは、世界観というものはそれぞれ自分の運命を世界と人間との普遍的な理解を根底として、その普遍的な事象の一事例として理解しようものにしてしようとするものである。新約聖書の考え方によれば、わたしはそうした普遍的状況において、わたしの真の実存を獲得するのではなく、いま、ここでという具体的状況において、すなわち自己を得るか、失うか、見定めがたい状況のなかで、自分の実存を獲得するのである。これは、わたしは、単独者として神の前に立つということなのである。(101)

信仰は、あらゆる未来の先取りとして、人間の非世界化を意味し、終末論的実存への転換を意味する。(110)

なんらかの総合、またこの二つにまたがる秩序の不可能性ということこそ、まさに、キリスト教的実存が終末論的実存であることのしるしなのである。

キリスト教の側からの世俗的科学への抗議というものは存在しない。なんとなれば、世界の終末論的理解は、世界説明の方法ではなく、非世界化は、世界解明においてでなく、ただ瞬間においてのみ完遂されうるものだからである。(113)

C. Glauben und Verstehen 3 (著作集 13)

5. 「キリスト教的希望と非神話化の問題」(1954) : ②④

両方の希望像が一ヘレニズム的グノーシスの規模有象と同様に、ユダヤの希望像が一神話的な希望像であることは疑いのないことである。

これら二つの世界像は、神話的な古代の世界像と結びついている。

現代の人間にとっては、この神話的な表象の仕方は縁遠いものとなった。(111)

そういう人間の実存の本質についての見解が、それどころか知が神話的諸表象の基礎になっているかという、いわゆる非神話化の問題である。(113)

世俗化による非神話化：マルクスやヘーゲルにおける歴史的発展とその目的の像は、非神話化され、世俗化された原始キリスト教的終末論である。(114)

人間の内面において、決して到達されない将来が確かに事実上そのつど現在となったのである。この場合、古い神話的希望像は世俗化されたのではなく、霊化されたのである。

(114)

6. 「科学と実存」(1955) : ④③

われわれを取り巻く世界やわれわれの出会う世界のもろもろの現象や、自然、歴史、人間、そして人間精神の方法論的研究を、われわれは科学と呼ぶ。

独特に人間的な生き方を実存と呼ぶ。

科学は、諸現象を認識しようとすることによって、諸現象を思惟の対象とし、諸現象を「対象化する」。(139)

科学においては、対象化する思惟は首尾一貫しており、方法論的に形成されている。

(140)

客観化する叙述が生じ得ないような実存的理解が存在する。(149)

人格的存在は実存的出会いに対してのみ開く。(150)

実存はそのつど、瞬間の諸々の決断における出来事であることを意味する。

客観化する思惟は、この思惟の対象が属している対象領域の連関からその対象を理解する。(153)

このことは、神学に対しては神についての主張は客観的主張としては可能ではないという洞察に結果することになる。

神については実存からのみ、おそれとおののきのうちに、感謝と信頼の内に語られ得るのみである。(155)

7. 「ルネ・マルレに問う」(1956)

神話的思惟と現代的思惟の対立を強調した際にいつも私は、両者の間に共通性が存することに、つまり両者共に客観化するような思惟であり、したがってある意味で神話的思惟は素朴であっても科学的な思惟と呼ばれうる点に共通性が存在することに、実際どんな疑いをもはさまなかつたのである。(227)

新約聖書の帰省の諸々の物語の実存論的意味は明白にされることができ、現代の人間の人格的生は客観化する思惟の対象ではあり得ない。(227)

D.Glauben und Verstehen 4(著作集 14)

8. 「非神話化の問題によせて」(1963) : ④⑤

未来への開放性、将来的であるということ

歴史についての実存論的解釈が歴史的(historisch)な過去の客体的観察を必要とすることは、まったく疑問の余地がない。(171)

歴史科学は、歴史過程を、客体化の視線をとおして一つの完結的な作用連関として理解するのであり、その限りにおいてそれ自体非神話化を行っているのである。(171)

神話の位置づけに関しては、自然科学との間に根本的な違いがある。すなわち、自然科学は神話を排除するが、歴史科学はそれを解釈しなければならない。歴史科学は確かに一つの歴史的現象である神話論的叙述の意味について、問いを提出しなければならない。

(172)

原始科学的な、したがって事物を客体化する思考は、事実すべての神話論に共通のものである。

神話論的思考はしかし、素朴な仕方では彼岸を此岸に対象化する。……非神話化の試みは、これに対して神話の本来的意図を貫徹させようとする。すなわち、人間の本来的現実について神話それ自体に語らせようとするのである。(173)

決定的なことはそうした比喩や象徴が現実的に一つの意味内容を含んでいるということ

なのであり、それを明らかにすることこそ哲学的、神学的省察の課題なのである。したがって、こうした意味内容がここでまた神話論的言語で表現されることはあり得ない。なぜなら、もしもそうだとすると、またしても解釈されねばならず、それは無限に続けられることになるからである。

神が客観的に確認されるこの世の現象でない以上、神の行為についてはただ、それとの邂逅をとおして生じる我々の実存について語るという仕方でのみ語りうるに過ぎない。神の行為についてのこうした語法を、我々は「類比的」と名付けよう。(174)

この命題は逆説が含まれていることになる。なぜなら、それはこの世の出来事と彼岸における神の行為との逆説的同一性を主張するからである。(175)

この逆説は、歴史的な出来事が、同時に終末論的であるという主張に通じる。(176)

9. 「イエス・キリストと神話論」(1958)

(4)「科学技術の神学」の再生

1. 科学と神学の分離論への疑問

- ・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？

決断の抽象化

- ・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。

神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。

- ・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方で前提にしていないか。

科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？

- ・意味概念(意味世界)は、分離論においては一面化＝抽象化する。

意味は、主観性、客観性、相互主観性のすべての包括する。

- 2. 神学は、科学技術に対する批判的な関わりから離脱しえない。解放・救済の問いを手放さないかぎり。「科学技術の神学」の再生は不可避的である。しかし、その基盤は？

<参考文献>

1. リンドバーク／ナンバーズ編 『神と自然』みすず書房。
2. マクグラス 『科学と宗教』教文館。
3. ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』(著作集別巻3)白水社。
4. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学(上)(下)』新教出版社。
5. J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
6. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社。
7. 深井智朗『超越と実在——20世紀神学史における神認識の問題』創文社。
8. 芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、『自然神学再考』晃洋書房。
9. ブルトマン『ブルトマン著作集』新教出版社。
10. 武藤一雄「第四章 終末論の問題」「第一節 現代神学における終末論—特にシュヴァイツァーとブルトマンについて—」(『神学と宗教哲学との間』創文社)、「解 釈学的原理としての「中」について—「非神話化」論と関連して—」(『宗教哲学の新しい可能性』創文社)
11. 辻村公一「ブルトマンとハイデッガー」(『ハイデッガー論攷』創文社)